
霧の箱

斎藤 聖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霧の箱

【Nコード】

N7560H

【作者名】

斎藤 聖

【あらすじ】

ごく普通の会社員、高橋真咲タカハシマサキは疲れていた。社会に心を碎かれ、限界だった。真咲は唯一の趣味であると共に癒す方法である夜のドライブに出かけた。いつもものように海を見るために。だが、その日だけは違っていた。気がつけば霧の中、鬱蒼とした山道を走っていた。真咲は焦る中、何かに目を奪われ崖から転落してしまう。気がつけば、小さな村にいた。そこで真咲は藤堂朱里トウドウアカリに出会う。幻想の恋が始まる瞬間だった。

第一話：迷い（前書き）

初投稿作品になります。語彙もなく、つたない文章ですが一生懸命書かせていただきますのでよろしくお願いします。真咲と朱里の幻想の恋を見守ってやってください。

第一話：迷い

霧に包まれてから僕はもう一時間近く車を走らせていた。フォグランプをつけ、しきりに上下左右を気にしながら。カーステレオからはノイズの入ったラジオが聞こえている。どうやら渋滞情報を報せているらしい。時折、刺さるようなノイズが入って、いつもより音量を上げているカーステレオはそれに呼応して刺さるような音を僕に伝える。

窓を少し開けてみると、湿った空気が僕の腕を舐めまわしているのがわかる。それはまるでサウナに入った後の開放感にも似ているのだが、今は閉塞感しか感じなかった。

唾を飲み込む。大音量のラジオよりもはっきりと喉が鳴ったのがわかる。掌にはじっとり時間が止まったような汗がこびりついていた。しきりにルームミラーが気になっている。

唐突に夜中に車を走らせてからもう何時間経つのだろう…

適当に走らせていた僕も悪いのだが、まさかこのような山道に迷い込んでしまうとは夢にも思わなかった。

いつものように城ヶ島の方に向かっていたはずだった。

ただ、途中から記憶がない。

だからといってこのようなところに来てしまった理由にはならなかった。人間、通いなれた道を走っている時は往々にしてそこまではつきりと軌跡を覚えているものではない。

3速に落とす。なかなか辛い坂道になってきていた。周りには鬱蒼

とした木々たちがそここにひしめき合っている。木々はアーチを作り空は見えないのだろう。そんな木々だ。だが、元々一寸先しか見えない僕にとってはどうでもよかった。

徐々に不安に包まれていくのがわかる。不安とは内側から蝕むものではない。足のつま先から徐々に体を駆け上ってくるものであると僕は思った。このまま迷い込んでしまうのではないかと思っていた。一本道ではあるが、霧がすべてをネガティブな思考にしているのだろう。僕はこのまま死んでしまうのではなどと思っていた。一本道なのに。道があるということは、それがなにかに繋がっているということだ。なにかに繋がりたいから道があるのだ。だから心配する必要なんてないんだ、なんて口に出してみてもノイズにかき消されていく。

…ノイズ？

いつの間にかカーステレオはラジオではなくなったのノイズだけを発していた。僕は舌打ちをして電源を切った。そうすると残された音はエンジンの音と僕の鼓動と湿った僕の溜息だけだった。

とにかく今は慎重に進むしかない。と口に出した瞬間、ルームミラーになにかが写った。僕は一瞬のうちにそれをなにかよくないものだと感じた。それと同時に見つめてしまった。

目の前は崖だった。僕の車はそのまま崖の下に吸い込まれていった。後に、僕が覚えているのは恐怖でも悲しみでもなく金属がつぶれる轟音だけであった。

第一話・迷い（後書き）

よかったら感想などください。お待ちしております。

第二話：出会い

どこかで声がする。誰かが僕を呼んでいる。
そんな気がした。

僕は手探りでその声のありかをつかもうとしてもなにも掴めない。
とても大事なもののなのに、そんな気がするのに。

暗闇の中、僕は裸で立っていた。あたりを見回してもあるのは暗闇
だけだった。奥行きもなにもわからない。

僕は座り込んで目の前を見つめた。声は次第に大きくなっていった。
手を伸ばせば届きそうなくらい。

でも僕はなにもしなかった。目の前を見つめるだけだった。

すると少し向こうになにかが現れた。白い光を放っていた。女性だ
った。僕と同じくらいのに25歳くらいだろうか。

彼女も何も着てはいなかった。だが、少しも性的な印象は受けな
かった。むしろ神々しいものにも感じられた。

僕は立ち上がって少しづつ距離を縮めていく。
どうやら彼女もこちらに来たいらしい。だが、足は固まったままだ
った。すこしうつむいて涙を流している。長い髪だ。

僕は走りだした。しかし、距離は本当に本当に少しづつしか縮まら
なかった。彼女は手を目にあてて泣いている。

とたんに足場が崩れていった。僕は彼女になにか叫んだ。だけど彼
女は首を横に大きく振った。

覚えているのは金属がつぶれる轟音だけだった。

…気がつくとも木でできた天井が目に入った。ハツとして体を起こそうとしてみたが、全身に激痛が走った。どうやらいたるところが折れているようだ。特に右足は動かさなくても激痛が走っている。少し落ち着いて考えようとしてみる。そうだ、僕は崖から転落したんだ。なにかに目を奪われて。一体なんだったのだろうか。しかし、どうやら間一髪で助かったようだ。誰かに助けられて運ばれてきたのだろう。とりあえず最悪の事態は回避できた強運に感謝しようと思った。

あたりを見回すと大体8畳ぐらいの部屋だろうか。家具は小さいこげ茶色のタンスに、まだ、変えたばかりなのだろう、草原のような畳が敷き詰められ、その反面、若干黄ばんだ障子が僕が寝ている足もとに見える。ものすごくいい香りがした。畳だろうか…

その瞬間、部屋の襖が音も立てずに開いた。僕は若干びっくりして、なぜか寝た振りをした。

「失礼しまーす…」

おそろおそろ顔を覗かせて、一人の女性が入ってきた。手にはお盆、上に水らしきものが乗っていた。

女性はなるべく足音を立てずに僕の布団に近寄って来た。そのまま音も立てずに正座すると僕の額に乗っていたタオルを取った。僕は一ミリも動かないように集中しながら、ばれないようにうつすらと目を開いて女性を見た。女性は冷たい掌を僕の額に手をあて、軽くほっとしたような息を漏らした。

「だいぶ熱引いたみたい。よかったよかった。」

彼女はしばらく手をあてていた。それはとても気持ちの良いものだった。頭の中にある種の淀みが広がっていく、そんな心地よさだ。

僕はそのままた、深い眠りに沈んだ。

次に目を覚ました時には、窓の外は夕暮れ時を映していた。どうやらかなり長い時間寝てしまったらしい。体は激痛もあってかかなり気だるい。溜息をついて目を見開いてみた。よかった、やっぱり生きてる…

「生きててよかった…本当にどうなるかと思った。」
そうつぶやいた瞬間、襖が音もなく開いた。僕は次はその襖の方に顔を向けた。

「失礼しまーす。あらっ」
女性は目をパチクリさせて軽くほほ笑み、軽く会釈をして部屋の中に入ってきた。髪の毛の長い女性だった。

「気がつきました？…もう2日、寝ていたんですよ。」
彼女は僕の布団の横で正座になり、そう言った。

「僕を助けてくれてありがとうございます。」
とにかくそう言いたかった。彼女はきよんととして

「あはは、いや、助けたのは私じゃないですよ。祖父が。」
彼女は手を口にあてて笑っている。それもそうだこんな大の大人の男をこの女性が担げるはずもない。

「っと…それもそうですよね。でも、寝ていた間世話してくれたのはあなたでしょう？ならお礼はさせてください。」
そういうと彼女は僕の顔の真上に顔をかぶせた。一気に彼女の顔だけが視界に入る。髪の毛が顔にあたってこそばゆい。

「なら、まずは体を安静にしてくださいね。お礼はそれからで。」
まるで姉のように僕に言いつけ、

「なにか食べますか？さすがにお腹がすいたでしょう？」

と言いながら立ちあがった。僕は「おかまいなく」と言いたがったが、この姿で何を言うかと思ひ、

「何か：食べやすいものを。」

とだけ言った。彼女は振り返りながら

「少し待っていてくださいね。…あ、お名前は？」

襖のところまで立って見下ろしている。少しもいやな感じではなかった。

「僕は、高橋です。高橋真咲です」

「タカハシマサキさん…。私は藤堂朱里です。よろしく願いします。」

襖はまた音もなく閉まった。

これが僕と彼女の出会いだった。

第三話：幻想入り

僕がこの村に来てから2週間が経ち、少しづつ体を動かせるようになっていた。

あれから僕は朱里の家にお世話になった。僕は知り合いをよこして帰ろうとも思ったのだが、朱里は

「ここは見ての通り、閑散とした場所ですから同年代の人がいると楽しいです。よかつたらもうすこしゆっくりしていつてください。」
と言ってくれた。少し、少しだけ惹かれ始めていた。

目が覚めると、体は静謐な空気によく反応し、軋んだ。それでも無理やり起き、朱里の祖父の源次が作ってくれた松葉杖を引きよせ立ち上がった。よるよると窓際まで行き、窓を開ける。白い光が僕の体を包んだ。太陽はどうしてこんなにも人を温かくさせるのだろう。気持ちのよい目覚めになった。動かしぶらい体を無理やりに動かしてみる。関節のあちこちがまだ痛む。もうしばらく安静にしなければならぬようだった。

「真咲さん、起きた？」

振り向けば襖を少し開けた朱里が覗き込んでいた。

「ああ、朱里さん。おはよう。というか、いきなり入ってくるのはやめてくれよ。」

笑いながら言った。

「あ、ごめん。ほら、家には私とおじいちゃんしかいないでしょう？だから、ついね。」

朱里は目隠しするふりをした。

「いや、別にいんだけどさ。これは僕が間違つて朱里さんの部屋にノックなしで入っても文句はないよな？」

朱里はちよつとツンとしながら

「はたきますよ。」

とだけ言つて、部屋に上がった。慣れた手つきで僕の布団を畳んで押入れに押し込み、花瓶をもって部屋を出た。僕は朱里の祖父のものであるう浴衣を着て、上からパーカーを羽織つて部屋を出た。よく掃除が行き届いている廊下を抜けて和室に入った。

「源次さん、おはようございます。」

源次は朝から手のひらサイズの木彫りの仏像を目で舐めまわしている。

「真咲くんか。おはよう。どうだ、足の方は？」

源次は仏像から目を離さず言った。僕は丸まった肩を見つめながら言った。

「ええ、おかげさまで。左足の方は大分。ただ右足がまだ痛みますね。」

「そうか…まあ、無理はするなよ。」

「ええ、松葉杖大切に使います。」

源次はフンとだけいい、また仏像に意識を集中した。僕は和室をそのまま抜け、その先にある台所に入った。台所は大体16畳ぐらいあるだろうか、広々としていた。中央には料理をするようのがあり、朱里はそこで大根をトントン刻んでいる。

「うわあ、いいにおい。」

僕はことごと音を立てている鍋を見つめた。朱里は嬉しそうに、「まったく、真咲さんが来てから料理がたくさんいるようになったな。困ります」

と言つて、忙しそうにしている。ただ、足取りは軽く楽しそうだった。

「朱里さんは料理好きなの？」

朱里はこつちを見ずに、

「別に好きじゃないわ。毎日作っているとさすがに嫌になるかも。」と言つた。

「その割には楽しそうだけど。」

「だって、おじいちゃんはなにを作っても、うんともすんとも言わないんだもん。作る甲斐がないわ。まあ、その点、真咲さんはおいしいって言うってくれるから今は作り甲斐があるな。」

朱里はねぎをたくさん刻んでいる。その音は小気味よいリズムを僕に伝えた。トントントンと。

「まあ、実際朱里さんの料理はおいしいから。少しは転落したかいがあったかな。」

僕は冗談交じりに言った。朱里は照れながら、

「変なこと言わないでください。まったく……え？」

朱里のリズムが止まった。僕を見つめながら言った。

「今、なんて……？」

ただならぬ雰囲気には僕はどうしていいかわからなくなった。松葉杖を握る手が一瞬で固まる。なぜだろう。朱里の動揺は僕の心を一瞬にして凍り付けさせるようだ。

「だから、料理がおいしいって。」

朱里がどの言葉に反応したのか僕は理解していた。でも、それしか言えなかった。朱里は頭を大きく左右に振った。

「そのあと。」

「……転落したかいがあったかなって。」

朱里は少しうつむいた。その眼は宙空を見つめている。

「どうかした？」

僕は一歩近づいて聞いた。聞かざるを得なかった。朱里はハツとしてほほ笑んだ。

「なんでもないの。気にしないで。」

そういうとまた包丁を握った。トントントンというリズムが静かに僕の体に波紋を広げていた。

少し震えている。

「どうかしたの……？」

僕はまた近づいた。

「なんでもないので…別になんでもないので。」

朱里は睨みつけるように僕を見た。そんな朱里を見るのは初めてだった。

その瞬間、僕の視界が揺らいだ。そこにある椅子や、机、大根や鍋、匂いでさえも、ゆっくりと薄らいで、揺らいで、消えていく。もちろん朱里も。

「なんだ…？」

僕はそのまま崩れ落ちた。この世界に僕の足はもう立てなかった。

「…ないで。真咲さん…！」

消えゆく意識の中で矢のような朱里の声だけが揺らぐことなく聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7560h/>

霧の箱

2010年11月14日03時12分発行